

「春の玉川上水を歩く・羽村の堰」講座報告

報告および感想 下田 孝

日時： 2010 年 5 月 9 日(日) 9:00 - 18:00

天候： 快晴、無風。 半袖下着に夏用長袖シャツでも多少汗ばむ気温。

場所： 玉川上水(羽村取水堰～小平監視所)周辺の地理的・歴史的要素各地

講師： 大船武彦会員 幹事： 中村華子会員 参加者： 講師・幹事を含め 22 名

＜講座のねらい＞

玉川上水ができたことで、武蔵野の自然はどのように変わったのか、現在の姿から、上水建設以前、江戸期から明治を経て戦前までの姿を思い描く。

テーマ 1：なぜ江戸初期に玉川上水が計画されたのか

テーマ 2：玉川上水の開削工事について

テーマ 3：玉川上水によって、武蔵野がどのように変わったか

＜当日の見学地概要＞

09:15 集合場所・国立駅南口を貸切バスで出発。

09:40-10:45 西武線・玉川上水駅到着。上水に沿って小平監視所、たぬき堀などを見学。

駅前まで水量豊かな流れ(写真 1)は、駅すぐ下流の分岐(小平監視所・写真 2)で大部分が現在も水道水として使われる東村山浄水場へと別れ、ここから下流は東京都の「清流復活事業」で「せせらぎの水音が聞こえる」程度に大幅減少する(写真 2 の右側の分水)。水量の減少で江戸期の壁面が露出している(写真 3)。

たぬき堀(胎内堀り)は「新堀用水」の分水工事で使われた工法。分水は幅が狭いので開削で深く掘るよりもトンネル掘りの方が費用も労力も少なく済んだとのこと。新堀用水の上流部約 900m がトンネルで、両端から掘り進んだのでは時間がかかるので途中約 60 ヶ所に竖穴を掘り、作業の出入りと土の搬出口として利用した。現在は安全のため大部分が埋められてしまったが、4 ヶ所が鉄柵で囲われて残されている、その一つを見学。(たぬき堀については、小平市立図書館 HP の記事を一部引用)

11:00 立川飛行場北側着。ここは昭和 30 年代の前半に立川基地拡張反対の激しい「砂川闘争」が展開された土地。記念碑や当時の様子を伝える説明板などを見学する。



ここから歩いて、砂川邸、見影橋、巴河岸、残堀川の付替えの跡、現在の玉川上水と残堀川の交差を見学した。

- ・砂川邸：400 年前に砂川村の新田開発をした庄屋の家。立派な門構えで現在も子孫が居住(写真4)。広大な敷地で、世に「一町屋敷」（1町は1万平米）という言葉があるが、それをはるかに上回る1辺が200米位ある屋敷地と見た。玉川上水の水を個人で導入できたのは、この砂川邸と福生にある酒造家「嘉泉」だけだったとのこと。



写真4

- ・見影橋と源五右衛門分水：見影橋は江戸時代からの玉川上水の橋。もちろん今はコンクリート。この脇に上記「庄屋・源五右衛門」への取水口があった。取水口は枡形の1辺の寸法で決められ、源五右衛門分水は9寸の大型であった。写真5の左手に見える水門（←）は現在の砂川分水取水口。江戸期の枡形は手前、橋の付け根にあった。



写真5

- ・巴河岸：見影橋の下流すぐ。明治3年(1870)、玉川上水を使って江戸ー砂川間の舟運が許可された、その船着場跡。しかし通船は、飲み水が汚れるとの理由で、2年間で廃止された。
- ・古残堀川の跡：残堀川は、砂川地区で古・旧・現と3回に渡って水路が変更になっている。その古水路跡には立川市教委が立てた「市指定史跡」の説明板が立っているが、どこが河川跡なのか素人には判別不明。大船講師の現場説明で了解。
- ・残堀川の旧水路と現水路：玉川上水の開削で、残堀川は玉川上水に繋がられて補水とされた。明治期になって残堀川の水質劣化で上水から切り離され、上水の下をくぐる形で交差することになった。戦後になってプリンス自動車(現・日産)村山工場建設のために河道は工場の西側を迂回するように大きく変更され、今日に至っている。

写真6は新おちらし橋からの残堀川。

右木立下の川壁に開口部が見える（→）ところが旧残堀川(写真7)の流入口。



写真6



写真7

- ・玉川上水と残堀川の立体交差：今回の講座の圧巻の一つ。明治期の改修で玉川上水と交差する形になった残堀川は、当初は上水の下をくぐる方式だったが、昭和 60 年代に上水が下をくぐる形に変更された。写真 8 は交差部分の残堀川、写真正面の壁の金網の向うに玉川上水の上流側が見える。

写真 9 は上水が残堀川をくぐったサイフォン出口。奥に見える青色の欄干の橋が写真 8 にもある橋で、その下が残堀川。



写真 8



写真 9

12:30 バスに乗って横田基地西側を通過して、西多摩郡瑞穂町箱根ヶ崎の狭山池へ。

12:50-13:30 狭山池 (写真 10) は残堀川の水源地で、活断層・立川断層の跡とのことなるも、素人には判別できず。今は整備された公園になっていて、日陰を選んで昼食。



写真 10

13:50-14:00 羽村駅東口近傍にある「まいまいず井戸」(写真 11) 見学。「まいまいず」とはかたつむりのことで、井戸に降りていく通路の形が似ていることによる。筒状井戸を掘りにくい砂礫層部分を掘り抜く必要からこの形態になった。最初に掘られたのは鎌倉時代と推定されているが、昭和 35 年に町営水道が開設されるまで使われていたとのことで、井戸には今も水がある。

14:20-14:50 水喰土公園・・・今回の講座の圧巻の一つ、玉川上水工事失敗の跡。「みずくらいど」という地名は玉川上水の開削工事の際、この付近で水が地中に吸い込まれ失敗したことに因む。開削跡は立川段丘崖に沿って公園内をほぼ南北方向に走っている (写真 12)。

写真右上に見えるのは青梅線電車、左の盛り上がった土の反対側に現在の玉川上水が流れている。なお、この付近の玉川上水の堤防には金蘭・銀蘭が咲いていたが盗掘が多いようで、数は少なかった。



写真 11

15:20-16:15 羽村市郷土博物館、草花丘陵・浅間岳見晴台

博物館では羽村附近の多摩川の地形や変遷、玉川上水と地域との関わりなどのパネル展示を見学。その後、多摩川右岸の草花丘陵の中の浅間岳見晴台まで登り、多摩川・羽村市街・狭山丘陵などを望見。

途中では露出している砂礫層の観察、堤防決壊を防ぐ「牛柵」の復元展示もあった。歩道橋を渡って左岸の羽村取水堰へ。



写真 12

16:25-17:10 羽村取水堰・・・今日の締めくくりの圧巻。

写真 13 は多摩川下流側から見た取水堰(中央右)の遠望、写真 14 は第一水門で、手前の流れが玉川上水へとつながるが、水の大部分はここから村山・山口貯水池に送水、さらに小平監視所で残り部分のほとんどが東村山浄水場に送られることになる。



写真 13



写真 14

最後の 20 分ほど、大船講師が持参してくれたワインと地酒で打上げの乾杯。

18:00 立川駅にて解散

<感想>

立川から羽村取水堰までの玉川上水、および関連する残堀川などの、自然環境・歴史遺産などをたつぷりと観察し学ぶことができた、素晴らしい講座であった。

「素晴らしい」をもたらしてくれたのは、今年の矢川周辺観察会と同様、天候に恵まれたことも一つの要因ではあるが、なんといっても大船講師の①豊富な知識、②わかりやすい解説、③その解説を伝える良く透る声、④無駄のないコース選択に 100 % 負うと言える。

大船講師の知識・解説は、地質・動植物から地域の歴史・民俗まで、幅広くカバーして、聴いていて飽きることのない、素晴らしい説明であった。あらためて、大船講師に深甚の謝意を表するとともに、大船講師に依頼して昨年に続いてこのような素晴らしい講座を企画してくれた中村華子幹事にも、深く感謝する次第です。

以 上